

## 自然科学と向き合う

川合大輔著『土田杏村の思想と人文科学——一九一〇年代日本思想史研究』  
(晃洋書房、2016年4月)

牧千夏



本書は、1910年代における土田杏村の思想を中心に日本思想史を研究することによって、人文科学という学問領域の成り立ちを考えることを目的としたものだ。杏村が、その専門を自然科学から人文科学に転じたという経歴をもつことと、1910年代に人文科学という言葉が流通し学問としての意義が問われたことを研究の背景とする。杏村が自然科学という視点を採用したことに着目する本書の視角を、私は興味深く思った。幅広い視野をもって学問に臨んだ杏村は、人文科学の極北ともいえる文学をどう捉えたのだろうか。私自身は文学を研究の対象とするため、このような問いを抱いて本書を読んだ。まずは以下に概要を示したい。

第1部の「第1章 思想形成の出発」では、「絶対他力教に対する疑問」の分析によって杏村の初期思想が明らかにされた。杏村は、現世界に懐疑と創造との余地があると考えており、その余地に宗教が「哲学的断案」を下すと考えたという。著者は、これを文明批評家として出発する以前の杏村の思想だとした。

「第2章 文明批評家としての思想の萌芽」では、「釈迦根本の哲学思想」において、杏村が姉崎正治らの仏教研究を基に、新たにカントの認識論を織りこむことで、実践という視点から釈迦を解釈したことが論じられた。加えて「小木に居て」において、杏村は主観や本能を重んじた高山樗牛の思想に賛成しながらも、それから10年以上を経た1910年代においては、客観的事実を考慮すべきだと説いたことが指摘された。著書はこれらの論文に、思想の実践性を重視する杏村の文明批評家としての萌芽を見出した。

第2部の「第3章 文芸復興と表記されたルネサンス」では、学問の方法論が議論された明治初期に着目し、その時期に出版された高山樗牛『世界文明史』が分析される。そこで樗牛は文明史の核心を人間「精神」の歴史的経緯だとした。そのなかでルネサンスは、一元的な「宗教的形式主義」に基づく「精神」から、現実世界の観察に基づく「精神」

への変化だと捉えられ、「文芸復興」と訳される。しかし、著者は樗牛以後の日本の学術「精神」が、新しさに一元的な価値をみるいわば「宗教的形式主義」だと批判した。

「第4章 『書齋より街頭に』『哲人主義』にみる田中王堂の思想」では、杏村に影響を与えた王堂が、現実に即した思想を形成したことが取り上げられた。しかし、それゆえ王堂の思想は、理論として不十分な、単なる態度論としてみられたと指摘される。一方杏村は、ロマンティズムを重んじる1910年代において「現実へ近く置かれた」王堂の哲学を斬新と評価したという。著者はここに、文明批評家としての杏村の特異性を見出した。

「第5章 〈大正デモクラシー〉期初頭における知識人たちの憂慮」では、近代日本史研究における、知識人の思想と社会情勢の大局とをつきあわせる方法論に一石が投げられる。そして著者は、西田幾多郎が近代知識人の思想の皮相性を憂慮したことから、基礎学の発達を主張したことなどを例に挙げ、知識人の憂慮が「割合に素朴で、現在に近い」と指摘した。しかし、これが社会情勢の大局とつきあわせるという思想史研究の方法論の乗りこえとなるかについては、疑問が残った。刺激的な問題提起であるだけに、西田らの個別の先行論に言及するのを感じた。

「第6章 1910年代におけるサンディカリズムに関する言論と知識人の存在意義」では、大杉栄が無数の物質の運動によって宇宙が構成されるという天文学の論を根拠として、無数の労働者の意志を拠り所にしたサンディカリズム論を構築したことが取り上げられる。しかし杏村は、大杉の論に従うとそれぞれの意志が衝突すると批判し、それら意志を代表させる議会政治を擁護した。その際、杏村は芸術における「象徴」を根拠としたことが指摘された。著者は、大杉が自然科学・社会科学を、杏村が人文科学を根拠としたところに、差異を見出した。

「第7章 〈問題文芸〉論の位置と問題点」では、中村星湖の「問題文芸の提起」が取り上げられた。星湖は自然主義

が支配的な文壇を批判し、作家は自己の生活の問題を追究し、未来を暗示する作品を書くべきだと提起したという。それに対し杏村は、芸術に問題という視点を介入させることで抽象度が増すことと、作家が問題を限定することで読者の解釈の余地を狭めることを問題視したことが指摘された。著者は、この議論が政治や文学におけるパラダイムの転換期に起こったことに着目する。パラダイムの転換期には、知識人と民衆とがその知識の伝達において「主従」関係に陥りがちであるのに対し、杏村は読者や民衆という観点を持ち込んだ点が評価された。

第3部の「第8章 1910年代後半における人文科学の存在意義をめぐる動向と知識人の思想」では、明治以降、自然科学が学問の中心となるなかで、知識人たちが人文科学の存在意義を探ったことが明らかにされる。まず、人文科学の地位の低下が、東京帝国大学の文科生の進路から論証された。その状況に対し、文科出身である芳賀矢一や生田長江らは、法科万能主義排斥論を通じて人文科学の存在意義を提示したことが指摘される。加えて、言論界における心理主義と論理主義との対立において、知識人たちが人文科学のアイデンティティを構築するという同一の理念をもつことが示された。

「第9章 神秘をめぐる思潮と象徴主義」は、1910年代末期において、知識人が象徴主義と生命主義との立場を通して捉えたものが明らかにされる。20世紀初頭に話題となった「神秘」は、自然科学に基づく主知主義に対抗して、不可思議なものを対峙させるための概念ではないという。哲学の分野では、西田幾多郎が経験そのものである「直接経験」を統一して認識することを「直覚」とし、そこに「神秘」がはたらくと考えたことが指摘された。芸術の分野では、科学で説明できない「神秘」を表現したのが象徴主義だとする説があったことが取り上げられた。

「第10章 1910年代における近代日本哲学をとりまく状況と土田杏村の『象徴の哲学』」では、自然科学偏重の学問情勢の下で、哲学科は自然科学と異なる知識を追究し、杏村の思想にもそれが反映されたことが指摘された。杏村は、物理的・心的に現実を分節化するという言語の機能に着目する。そしてこの機能が前提である言語や論理においては、分節化以前の体験そのものを思考するのに限界があると考えたと指摘される。アカデミズムの基礎である論理に目を向けた点で、杏村の指摘が評価された。

ここで結論部分をまとめつつ、本書で示された1910年代における杏村の位置について、私なりに整理してみたい。

論の前提となるのは、人々の関心や政治的・経済的な配分が自然科学に偏重していたという1910年代の状況である。人文科学系の知識人たちがその危機的な状況のなかで、どのように自らのアイデンティティを確保したかについて焦点が当てられた。なかでも杏村は、両者の方法論の違いにきわめて意識的であった。すなわち、自然科学が対象から普遍的な法則を見出し、現象を必然的に起こるものとして捉えるのに対し、人文科学は対象の個別性を記述し、現象を偶然的、一回的に起こるものとして捉えるという違いだ。人間を矛盾的な存在だと考える杏村は、認識の体系や原理の解明を目標とする認識論を追究するために、人文科学の方法論が適切だと考えた。そこで、「象徴」という概念を経由して、着目されたのが体験である。なぜなら、象徴がある理念を具体的な姿において表現することであると同様に、認識の全体像が個別の体験に具現化すると考えたからだ。そして、体験の世界にもっとも近いものとして芸術と宗教とが批評の対象として選ばれた。

私がこのなかでとりわけ興味深く思ったのは、杏村がこのような思想を背景として、初期から継続的に、現実性はあるか、実践的であるかという評価軸で文明を批評したことだ。なぜなら同時代の文壇でも、実践という観点から芸術論が議論されていたからである。第7章で、杏村は「文芸は言葉や文章の力によって現実を象徴する」ことを前提に、〈問題文芸〉が文芸を抽象化し、読者の読みを限定的にすると批判したことが取り上げられた。確かに、体験の個別性・具体性を重視する杏村が、文芸の抽象化を批判したことは理解に難くない。一方で、読者の読みへの配慮をどのように考えればよいだろうか。著者は、ここに反教化主義の態度を見出し、芸術における民衆の主体性に価値をおいた民衆芸術論と連続性があると指摘した。しかし、杏村の読者に対する姿勢にどこまでの射程が読み込めるか疑問が残る。著者も触れていたが、大杉栄は1917年に「新しき世界の為めの新しき芸術」を発表し、民衆芸術を民衆が主体的に「歓喜と元気と理知」とを楽しむものだと言った。一方、第6章では、大杉は労働者の主体性に価値をおいたが、杏村は労働者の衝突を懸念したと指摘された。私はこのことを、大杉が労働者の主体性を信頼し、杏村が労働者の主体性に留保をつけたと受け止めた。加えて、杏村が芸術の個別性、具体性を重視したのは、そこに認識の全体像を見出せるという哲学的な野心からであり、洗練された芸術が対象であるように思われた。そのため、芸術実践の主体となることで得られる民衆の快楽や民衆

の主張、またそこで生まれた素朴な芸術を杏村は評価するように思われなかった。杏村の体験(実践)と読者に対する姿勢は、民衆芸術論やこの後のプロレタリア文学運動にどのような視点を提供したのか、課題をもらった思いであった。

とはいえ、杏村が「実践」「体験」の問題を継続的に問うていたこと自体には納得させられた。このような一貫した問題意識が導き出されたのも、著者が貪欲に追究を続けたためである。本書は、先行論に目を配りつつさらに深く掘り下げようとする姿勢によって、多岐にわたる杏村の批評活動の核心をつかみだすことに成功している。